

# 心ふれあう おかやまのちょっといい話

ちょっといい話

※チラシは偶数月の第一月曜日に皆様におとけしています。  
過去のシリーズはアーバンホールのホームページでもご覧いただけます。

シリーズ⑨

## 青の運動靴

今でこそ私にも孫ができ、人並みの生活をさせていたでいます。が、それはそれは貧しい家庭環境で育ちました。

母一人、娘一人。幼い私にはよくわかっていませんでしたが、世の中は高度経済成長まっただ中で、やれ進めという時代に取り残されたような母娘でした。

45年前、1969年アポロの月面着陸を近所のお家のテレビで見た。私は小学生でした。

運動会を迎える前、学校みんなが新しい靴を買ってもらったという話で盛り上がりました。

私も早速家に帰って母に「みんな、新しい靴買ってもらうとるけん、私にも買って」と言いました。実際、私の靴は結構傷んでいましたし、母も「そうね」と言ったので楽しみにしていました。

1週間ほど後、突然母が青い運動靴をくれました。

まだきれいなのですが新品ではないようです。

「佐賀のおばちゃんに送ってもらったのよ。明日からこれを履いて学校行きなさい」と言われましたが、「いやじゃ、こんな青い靴、今までのでええ」と言っていました。

私はバツが悪く、遊びに行くと言い泣きながら家を飛び出しました。私の学校の靴は白と決められているのです。

昼も夜も仕事で忙しかった母は授業参観にも一度も来たことがありませんでした。だから、そのことは知らなかったのです。



家を飛び出すとき母の悲しそうな顔が目には焼き付いています。

歯を食いしばって泣きながら走りました。子供ながらに、貧乏だからお下がりで我慢するしかないのかわかっていました。

幼い胸の奥に仕舞いきれなかった気持ちだが、涙となって流れていました。

言葉足らずで飛び出した私は、その後もぼろぼろの靴で通い続けました。青い靴は家用として履くことで母も納得してくれました。

その後も母の悲しい顔を思い出すたびに後ろめたい気持ちになりました。

昨年、その苦労人だった母が他界しました。82歳でした。お通夜の席で、佐賀の叔母さんとその靴の話になり、母が電話口で笑ったと聞きました。「せっかく靴を送ってもらったのに、気に入らないってはないのよ、困ったもんね。」私は長年、悪いことをしたなという気持ちを持っていましたので、笑っていたという叔母からの話を聞いて胸のつかえがとれたような気がしました。

あの頃は母娘だけだと思つていました。多くの方に送ってもらえる母を見て、「母に負けないようにこれからも生きなさい」と、背中を押された最後の別れでした。



親思う 心にまざる 親心 けふのおとずれ 何ときくらん 吉田松陰

子が思う以上に親が子を思う心の方がはるかに深いというものです。そのことも自分自身が親になって初めて気がつくものかもしれません。親子というものの大切さを今一度振り返ってみてはどうでしょう。

葬儀・法要・ギフト

あなたのアーバンホール  
アーバンホール

皆様の『心ふれあう おかやまのちょっといい話』をお寄せください。

ご応募いただいた優秀な作品はアーバンホールのホームページ上・チラシなどにてご紹介させていただきます。ご意見・ご感想もお待ちしております。またご応募いただいた方全員にささやかながら粗品を進呈させていただきます。  
◆応募先/アーバンホール「ちょっといい話」係 〒710-0841 倉敷市堀南805-1 ◆記入事項/①住所②氏名③電話番号④年齢⑤エピソードご応募の方は1200文字程度(原稿用紙・ワープロいずれも可)にてお願い致します。尚、作品の返却はありません。